

こういうTSモノが読みたい ーR18ー

Yamahaだ岩肌

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です。

内容としては基本的に親友くん×TS娘のカップリングとなっております。

作者の性癖詰め合わせ箱です。控えめに言って泥水やダークマターみたいなもんです。エロい方が濾過して飲料水に変えて頂けると全人類が幸せになります。

「こういうのが読みたいんだよ」って偉大な先人様方にクソリップを送るのも憚られたためこういった小説でお目に止まればと思い生成しました。

もしもお気に召さない時はご自身で性癖を具現化していただけたなら幸いです。

理想のTSモノが読みたい？おおう（ry 画面の向こうの君も書くんだよお!!!（ペニーワイズ式勧誘法）

目次

親友さんとTS娘ちゃんの目隠しエッチ	1
親友さんとTS娘ちゃんのハジメテ	19

親友くんとTS娘ちゃんの目隠しエッチ

なんか、俺の親友が朝起きたら性転換していたらしい。

理由はよくわからないが人類の進化による作用がどうのこうのと難しい話らしい。有名なy o u t u b e rとか俳優も性転換したりして話題になってたしそういうものなんだろうな。

偶然にも親が旅行に行ってる夏休みに性転換して、どうしていいのかわからなくなり、混乱のまま息を切らせて俺の家に来ってきたアイツの話聞いてやったら、なんやかんやあって恋人になった。ネットとかで見るとみたいに関換した人が精神負荷に耐えきれず錯乱して傷害事件を起こすとかそう言った雰囲気も全くないしひとまず安心だ。

その後も付き合いは続いてセックス… アイツ風に言うならエッチするのは日常の一部になったぐらいだ。

もともと興味津々だったんだろうな。一度目は怖がってたんだが、二度目からはアイツから誘ってくるようになった。体位がどうのこうの Spre がどうのと調べてきて楽しそうだ。

ハジメテの時はアイツが壊れてしまわないかと心配ばかりしてそんなこと考える余裕もなかったんだが、何度もエッチするうちに今の楽しそうなアイツを見ているとちよつとだけ怖がらせてやりたいなって考えてしまう。ハジメテのアイツが怖がったことを思い出すと背筋がゾクゾクしてきてもう一度その顔を見たいなって思ってしまうから今日泣かせてみた。

これはそんな俺と性転換した元親友との日記の一ページ

「お〜い！親友！エッチしようぜ！ほらほら、オマエさんのおちんちんをオレの大事な所に抜き差ししようや」

そう言っつて、俺の古着を着ているアイツが俺のベットの所で叫びだした。

「時間があれば盛ってるじゃねえか、俺らは発情期のサルじゃねえんだぞ。少しは控えようつて気が起きないのかこの淫乱TS娘は…」

「何言ってるんだお前だってやってたらノリノリのくせに〜」

こんな風にかいつは毎日が楽しそうだ。だからこそ、こいつを泣かせてみたらどうなるのか気になって仕方がない。

「まあ、否定はしない」

「じゃ、決まりな！今日はどうする？白衣の天使によるDOKIDOKI診察？それとも新妻風イチャイチャエツチにする？なんでもいぞ！最近はおレが決めてばっかりだったからお前が好きなのやってやるよ」

温め続けた秘策を出すときが来たな。どんな風に泣くんだろうか今から気になって仕方ない。

「ん？今なんでもって」

「おう、何でもだ。痛いのか苦しいのじゃなきゃなんでもいいぞー！」「それじゃあ目隠ししてセックスしような。しっかりオプシオンもつけてやるから」

「おお？目隠しプレイな、了解だ！初めてだからドキドキするなくどうする？婦警コスした時の手錠あるけどつけちゃう？目隠しに手錠とか。ついでにベットに手足を固定とかする？」

「ああ〜そうだな、足まで固定すると大変そうだから手錠つけて腕だけ固定するか。というからお前、俺はせいぜい目隠しくらいしか思いつかなかったのによくこんなに思いつくな」

ほんとにこいつのエロへの探求心には驚かされる。実は自分で開発とか進めてんじやないか？

ケツの穴をやってくれとか迫られたら困るぞ。こいつは好きだがやったらそのうち俺がケツの処女を散らす羽目になりそうだから困るんだよなあ…

男としてはケツの穴を掘られるのはキツイって

「へへっ、それほどでもないぜ」

「ほめてないんだが…」

なんかちよつと嬉しそうなのが腹立つな。

「それじゃあ、卑しいおレにこの真っ黒な目隠しと手錠を付けて下さいな。ご主人様？」

「いやお前、昨日のメイドが抜けきってねえぞ。お仕置きプレイじゃねえって、お前は目隠しして俺に気持ちよくされてれば良いの。黙って繋がれとけ」

油断も隙も無いな。隙あらば奉仕しようとしやがって・・・それは良いんだが今日はそういう感じのじゃねえから主導権を渡すわけにはいかんのだよ。

「はーい。おとなしくしてまーす」

「よろしい。それじゃつけていくからな。俺がきつーく目隠しを付けてやるからそれが終わったらベッドの上に寝転がれ」

ぎゅっと力を込めて結んでやる。キツイとか、ほんのちよつと痛かったとか小言をこぼしているがベッドの上に押し倒してやると体が少しこわばっているのが分かる。

初めての経験でどうしたらいいか戸惑っているって感じだろうな。大丈夫そうだしこのまま続けるか。

「次は手錠つけてやるから、神妙にお縄につけ」

「なんだよそれ」

軽口を言いあいながら準備を進めていく。

「はーい。バンザイしましょうね。えらいTS娘ならできるよね」

「さつきからなんだその口調は！馬鹿にするのもいい加減にしろよー！そんなの偉くなくてもできらあー！」

バツと腕を上げたこいつの手を取ってベッドの支柱にもう一個手錠を使って固定する。

カチャンと音を立てて固定が完了した。

「ハッ、このオレがハマられただとう」

「はっはっはっ、バカなTS娘よこんな幼稚な策に嵌るとはなあ」

目隠ししてベットに固定したらどこにも逃げられんな。こんな寸劇ができるぐらいだし多少泣かせても大丈夫だろう。

精一杯怖がらせてやるから覚悟しやがれ。流石にガチ泣きし始めたらやめるけれども途中まで楽しみだな。

「俺からのオプシオンだ。感謝して受け取れ。見えるか？お前の目の

前にあるぞ?」

「いや、見えねえよ! 視界なんて真っ暗だわ。分からないものを目の前に出されるってちよつと怖いんだぞ知らんのか!」

ちよつとビビってるビビってる。いつもの元気印もいいが、こっちの怖がつてる感じもいいな。

「おお、それはすまんかった。まさか見えてなかったとはなく。これはな、俺のお気に入りワイヤレスイヤホンだ。今からお前にこれをつけるから楽しんでくれよな」

「なんか今日のオマエ楽しそうな声してるよな。ちよつとだけ怖いんだけど、本当に大丈夫なのか? 痛いこととか苦しいこととかするなよ! 約束だぞ!」

「分かってる分かってる、約束するから安心しろって、痛くて苦しいことなんて絶対しないからさ。ささっ、イヤホン付けますよ〜」

「本当だろうな! なんかさつきよりもうれしそうな声してるぞ! 絶対今ニヤついてるだろ!」

「ホントホント、オマエノシンユウハ、ウソツカナイ」

ちよつとニヤついてしまったが一度キスしてやると大人しくなった。毎回、セックスの始まりはキスしてるから察してくれたんだろうな。

泣かせるのがかわいそうになってくるくらい良い親友で恋人だよホント。ま、泣かせるんですけどね。

ゆつくりとイヤホンを装着させる。さてさて反応はどうだ。

「え、波の音? オマエ、波の音なんて流してどうするんだ? もつと催眠音声的なのが流れてくると思って構えたオレが恥ずかしいぜ。しかもかなり音量小さいし」

「波の音にはリラックス効果がどうのこうのって聞いたから人体実験するのも悪くないなって考えたんだよ」

嘘だがな! 今回はリラックス効果なんて期待してない。俺が期待しているのはこいつが人に見られているような錯覚に陥ることを妄想して泣くことを期待しているんだ。

「人体実験ってなんだそれ。そんなことにつき合わせるなよ」

「ちよつとやってみたかったんだよ。野外でエッチしてるみたいな気持ちになろうぜ」

「なんだそれ、ビーチで青姦してる想像でもしてろっていうのか」
「そうそう、ちよつとマゾっぽいお前なら気持ちよくなれるって」

上から覆い被さつて、触れるようなキスから舌を絡ませるような深いキスに変えていく。酸欠になるんじゃないかってくらいずっとしてやるとコイツはちよつと苦しいけどそれ以上に幸せそうな顔をするからな。無意識なんだろうけどこつちとしてはすっげえ嬉しいし、ムラムラするんだよ。そういう訳でいつもなら酸欠ギリギリのデープキスはやめられねえんだが、目が見えないのは失敗だな。アイコンタクトができないといい塩梅が分からん。とりあえず胸を揉みほぐしながら反応が返ってくるまで待つとしよう。

「とうかこいつノーブラじゃねえか、人の家で脱ぎ散らかしやがって・・・来たときは普通に私服のスカートだったのにいつの間に着替えたんだ。」

「んっ・・・ はあっ、んんんっ」

4、5分続けてやれば酸欠からだろうが、俺を誘うように体を揺らし始めたしこれくらいでキスは切り上げて次に進もう。

「ふう、どうだ、興奮してきたか？」

「はあ・・・ はあ・・・ え、今なんて言ったの？」

「目隠しされて手錠で固定されたまま、男からの愛撫を受けるとかエロ過ぎだよなって言ったんだよ。自分の状態を想像してみろよ。こんな風に据え膳で女が置かれてたらどうする？男だったんだから、どうなるかぐらい賢いお前なら分かるよな？」

「こうやって耳元で囁いてやると目の焦点がちよつとずれてオドオドするのが可愛いんだよ。いま目は見えないんだが何度も見てるだけあつて簡単に想像できた。」

「考えがまとまって恥ずかしくなってきたのか手錠をカチャカチャと鳴らしながら肘をまげて顔を隠そうとしている。こいつを見ると予想通り俺の背中がゾクゾクと震えてくる。」

「と、とつても・・・ エッチ、だと・・・ 思い、んっ・・・ ます。」

「もしも、お前が男だったらどうする？」

「おつ、襲つちやう、んっ…かも、しれない…です。」

顔だけじゃなくて耳まで真っ赤にして可愛い。

想像した男側の興奮と、これから襲われる女としての興奮が合わさって息が荒くなっているっぽいな。

「これからどうなるかわかるよな？」

「はい…んっ」

「いってみろ、今みたいに胸を優しく愛撫されるだけか？」

「はあ…はあ…もつと、もつ…う、うう…」

いやいやと首を振って主張してきた。

恥ずかしすぎて耐えられなくなったみたいだな。仕方ない、言わせなかったんだがな。本当に残念だ。

「そうだよな、恥ずかしいよな…。わかったわかった、そんなに首を縦に振らなくても大丈夫だって、聞かなくてもお前の体は教えてくれるもんなく」

そう言うとピシッと固まったように動きが止まった。俺の考えが伝わったんだろうな。ぴっちり股を閉めようとして足に力を入れているが、間に入れてる俺の足が邪魔して閉じれていない。

観念したのか体を小さく丸めて震えている。

「おいおい、そんな急に縮こまってどうしたんだ？恥ずかしくて答えられないみたいだから確認してやるって言ってるだけなのになあ」

そう言いながら、ゆつくりと胸を愛撫していた手を徐々に肋骨、へそ、鼠径部と下ろしていく。

下に行けば行くほどコイツの股を閉じようとする力が強くなっていくのが分かる。息を震わせながら顔をさつきよりも真っ赤にして、そっぽを向いて形のいい耳をこちらに向けている。

ゆつくりと股に触れると俺が愛用していた薄い寝間着がぐちよりと濡れている。

む、ちよつと湿っている程度かと思ったが、この濡れ具合にダイレクトに触っている感じ、この娘っ子ノーパンじゃん。

まさか人の家でノーブラ・ノーパンになるとは…この親友の眼を

もってしても分からなかったぞ…

「よつぽど、キスと愛撫が気持ちよかったんだな、もうこんなにくしよぐしよだぞ。」

そう言ってから十分に濡らした指をへその周りに這わしてやると、また、いやいやと首を振り始めた。

一時的にイヤホンを外して耳元で囁いてやる。

「ぐしよぐしよだし、人のベットに下着も着ずに座るなんてこの淫乱が、これはしつけてほしいってアピールなのか？」

そう言つてやると、ビクツと体を揺らして喉をこくりと鳴らしている。フー、フーと荒い息をして、うう…とか、あう…と声を漏らした。

せかすように秘所を撫でてやると、またビクツと震えた。これはもう一押し必要なのだろうか、なかなか返事がない。

そつと、唇を塞いで舌を入れてやる。最初はいきなりの刺激に驚いていたがキスしていると分かれると積極的に舌を絡めてきた。それに合わせて寝間着の中に指を入れて直接秘所を撫でてやる。

「んんっ…ふう、うう…はあ、はあ…やつ…」

徐々に喘ぎ声も増えてきて、そろそろ気分もノつてきただろう。キスを中断して大事な所に指を挿れてやる。1本、2本と順調に入っていく、どれだけ弄つても奥から蜜が溢れてくる。

こつちとしてもそろそろ我慢の限界なんだ。

「脱がせるぞ。満足に返事もできないダメな子にはお仕置きしないと。」

んっ、と軽く返事して少し腰を浮かしてズボンを脱ぎやすいようにしているコイツにムクムクと悪戯心が湧いてきた。

寝間着をずらして太ももにキスしてから、無言で執拗に秘所を舐めてやる。

ぴちやぴちやとイヤホンで耳が塞がっているコイツにも聞こえるくらい音を立てて責める。

「ひあああつー！な、なにしてるの!?風、え？生暖かいつつ!?やああ、んっ…やつ…クリ刺激しないでえ…あつ、あつあつ…んっん

んんんやつつああああああああああああああああ

体を軽く震わせて絶頂した後、ズボンを脱がすために上げていた腰が落ちた。

荒い息を吐いているのを見下ろしながら愛撫を再開する。膣に指を入れて動かすだけではなく、クリトリスを丁寧弄って刺激を与える。いった後は刺激に弱くなってるから連続でイかないように優しく弄って欲しいらしい。注文の多いやつだよ、ゆっくり秘所を弄っていると夢見心地から帰ってきた様でまた喘ぎ始めた。時折、やだ、苦しいよおとか、はやくうなんておねだりしている。いつもなら挿れるがこういう状況だしもつとエロくおねだりさせたい。

というか、こういう時に言わせるのは義務だよな。

「なあ、こういう時ってどうしたらいいか分かるよな？」

また、手錠がカチャカチャと鳴り出した。

もじもじと体を動かして鼻から荒い息を吐きながら口を堅く閉ざしている。埒が明かないから少し強めにクリを刺激する。

「んんんつつ… えっ、… あう… …… ふううう、ふうう… …… えっ、とっ！… …… その、んっ… …… ふうう… …… わ、私のツ、おまんこに… …… あっ… …… その… …… おっ、おちんぽを、んんっ… …… くださいいー！」
いつもなら冗談めかして言ってるが、目隠しされて、隠れるわけないのに必死に肘で顔を隠しておねだりするのを見ると興奮する。分かってはいたが破壊力が段違いだな。

我慢しきれなくなった俺はズボンを脱がしてから自分のモノを取り出し、入口に擦り付ける。はあはあと荒い息をしているコイツに挿れると考えるだけで今にも爆発しそうだ。

「挿れるからな」

「うんっ、ああ… …… はいって、きてるう。や、きついよお… …… ふう、ふう… …… ぜ、ぜんぶ、はいった？」

眉を足れ下げて自信なさげに聞いてくるコイツに嗜虐心しやくやくしんが刺激されて仕方がない。しっかり鳴かせてやるからな。

「どれだけ挿入ったかって聞かれてもな、まだっ7分目くらいだぞ。あと少しだけ頑張れ、よ」

何も見えないことが怖いんだろうな。いつもよりもナカが締め付けてくる。

やば、思ったよりも余裕ない。最近でやった中で一番気持ちいいじゃん、気を抜いたら出ちまうぞ…

大丈夫だろうと思っただがきつつい…

「まだぜんぶ、んっ、はいつてえないの?…くるしいよお…はう、おっきいよお…いつもより、んっ…おっきいよお…」

オマエが締め付けてるんだよ!サイズは多分変わらないって…うっ、波がつ…ふう、危なかった…このままだと、最後まで挿入りきらねえぞ。

一度落ち着かせるか。

「ほら、キスするぞ」

「んっ…はやく、はやんんんっ…ちゅっ…はう、んう…きもちいよお…もつと、んっ、もつと…ちゅっちゅっして?」

キスで緊張がほぐれて締め付けが少しだけ緩まった。その隙を聞いてしつかりと奥までチンコを挿れてやる。

「ああっ!…んんっ、ちゅっ…はいつた?…おくまで、はいつたの?…はあ、はあ…んっ…おくに、とんとんって、ああっ!、あたってよお…ほんとにっ、ぜんぶはいつた?…もう、はいらな

いよ…んっ、やっ、おなか、いつぱいっ…なの…!」
「おつかれさん、しつかり全部挿入ってるぞ…じゃあ動かしていくからな、イク時は言えよ」

ゆっくりと動かしていく。ちよつと動かすだけで気をやりそうなほど気持ちがいい。

コイツも体をくねらせて快樂をどこかに逃がそうとしている。

Tシャツが邪魔だな、おっぱいが見えないじゃねえか。Tシャツの首元に使い古したせいで出来た穴があるから、そこに指をひっかけて弱くなった生地に沿って裂く!完璧だな。

ピンツと張った乳首を見せつけてくれるようになった。薄ピンクの乳首が体をくねらせるのに連動して、いやらしく動いているのを見て

いるともつと虐めてやりたくなるな。

「ひうつ… あつ、あつ、んつ… はあ、はあつ… ふううつ、んつ… や、もつとおつ、んんつ… ゆつ、ゆつくり、とんとんってねつ… おくにねつ、とんとんってえ、ツツ、してよお… イく、イツちやうよ… もつとゆつくりいい、ひうつ！」

うわごとのように垂れ流しているのを聞きながら俺は腰を動かしながら胸と乳首を弄りだした。胸は柔らかいのに乳首だけツンと固く勃っていて、柔らかいものの中に弾力のあるものがあると気になつて多めに触つてしまう。

「んつ、むねも、あつ… さわるの？いつ今、服、脱ぐね。あれ？あつ、んんつ、わたしって、服、ぬいでたつけ？んつ… おなかと、かたにいつ、シヤツ、あるし… フーツ、フーツ… ぬいで、ふくとかあああつ… ぬいで、ないよね？やあ、うんんつ！… あつ、はあはあ… なんで？… なんでつ、そんなあつ！さわりつ、かた、できるのっ？」

普通なら袖口とか裾の部分から手を入れて触るのに、今回は肩や腹に触れず胸を直接触られていることが不思議らしい。

自分が今どうなっているのかも分からないまま犯されているのを見るとゲスな発言だとは分かっているがもつと辱めてやりたくなる。

「それはなつ、お前が今、Tシャツを破かれてつ、勃起した乳首を晒して、目隠されたまま鉄の棒に繋がれて犯されてるんだよ！」

これだけ言えば今の状況が分かるだろう。喘ぎ声に混じった声にならない叫びを聞きながら腰の動きを早くしていく。

一瞬でも油断すれば果ててしまいそうな快樂の中、パンツパンツと体がぶつかり合う音と、コイツの喘ぎ声だけが響いてる。

「あつ、あつあつ… やつ… あつ、もう、むり、やだやだやだ、もつと、やさしくうつ、やさしくじやあああつ… んつ… なきや、んんツツ… やつ、だああつ… イつ、ちや… イつちやうつ、から！んんんつつ、はうつ、あつあつあつ… イつ、く… イくイくイツちやああああああああああんんんんつつ、やつ、んんんんつつ」

「締めつきすぎだつてっ、出る!」

「あああああつっ、やつ、でっ、でてる。うごかないでっ、ナ力で、うごかないでよおっつ。まっ… た、イっちゃううう、やだっ、イかせ、なあ、うんっんんんんんんっつ」

コイツが絶頂するのに合わせてすぐにイってしまった。

「あっ、んんっ… あっ… あっ… あっ… イっちゃった… はふう… えへっ、ちよつと休ませてね… いっぱいイっちゃたから、胸がね。ドキドキしてるの」

そう聞いて膣に挿れていた相棒を引き抜くと秘所と相棒の間に白濁な色をした橋がかかっていた、それを見た俺はついさつき出したばかりだというのに息を荒くしてコイツに覆いかぶさった。

「ちよつと、何してるの? やっ、首筋に息吹きかけないでよ… あっ、ひう… ちよつと、怖いよ… 返事してよお。今何してるの? どういう状況なの? 私は何すればいいんんんんちゅ、はむ… んんう」

俺は、混乱するコイツの唇をむさぼった。

まだよくわかっていないのかキスもぎこちないもので俺が一方的に食べているような感じだ。

キスだけでは我慢しきれなくなり、口は胸に噛みつくように吸い付き、指でコイツのナカにいる精子を掻き出すようにグチュグチュと刺激した。

「んんんう、な、んう、ちゅ… なんなの?… んっ、いたっ… へんじしてっ、ああっ、んっ… や、やだあ、1人で、ひうっ… 1人にしないで。1人で何回も。あっ、イクのやだああ!… あっ、んんっ… はあ、はあっ!… ちや、ちゃんどっ、おねだりっできなかつた、からっ… おこってるの? ううっ、イっつちや… フーッ、フーッ… ごめんんんっ、なさいっ… はじめて、めかくししてっ、やつあああ… アナタのおがっ、みえっ、なくて、んんっ、こわくって… はあ、はあ… けど、アナタにっ、みられてるって、わかってね… はずかしくって… どうすればね… ああっ… イイツ、のか… わからなくてっ… ごめんっ、なさい。あっ、じぶ

んのことしかつ、イツ、かんがえてっ、ない、いんらんなああつ……ま
がいものでっ、ごめんさい…… あああつ、ううううっ、イッチャ
う…… イッチャうからあつ…… やめて、やっあつあつあつあつ、んっ
んんんんんっつっ」

コイツの声と体に夢中になっつと貪りついていた。ふと、我に
返った時には目隠しの上からでも分かるくらい泣いていた。

「ひっ、グスツ…… なんてっ、ちゅーしてくれないのっ、こえきかせて
くれないのお…… ひとりぼっちは、いやだよ」

泣いているのを見ると、もう一度同じことをしたくなってくる。俺
の中で天使と悪魔が争っているが僅差で天使が勝利したようだ。

髪の毛を乱しながら荒い息を吐いているのを見ると負けたはずの
悪魔が蘇りそうだったが、なけなしの理性と倫理観で目隠しをイヤホ
ンと目隠しを取ってやる。

恐怖に染まった目が俺のことをぼんやりと見つめていたが、目が見
えることを分かり始めると泣き笑いのような顔をして、すぐに心の底
から安心したような笑みを浮かべた。

「よかったあ…… グスツ…… ずっと、そこにいたんだよね。逢いた
かった！」

ガチンと手錠が音を立てて、勢いよく起き上がろうとしていたアイ
ツを引き戻した。

すっかり安心しきっていたアイツは、えっ？と情けない声を出して
ボスンとベットに着地した。

俺は仕方ないなど少し笑いながら手錠を外してやる。確認すると
結構派手に暴れたからか手首が少し赤く腫れて手錠の痕がついてい
た。

肌の色に似合わぬ赤い線に吸い付けられるような気がしたが、俺が
何か行動を起こす前に手首が視界から消えて締め付けられるような
感覚の後、胸元に艶のある乱れた髪が見えた。

「ぎゅーって、したかったの…… 何にもしやべってくれないし、耳元か
らはずと波の音が聞こえてきて、海辺でずっと一人放置されてるよ
うな感じがあつて…… こわつくつて…… グスツ…… 捨てられ

たんじや… ないのかなって、かんがえちゃって… んっ、グスツ… そんなっこと… あるわけないのにね…」

上目づかいでへにやっとな力が抜けて安心した笑い顔のまま続けた。「こわかったのっ… ほん、とにっ… グスツ、そういうプレイだっかわかってても、こわかったんだからあああああ」

俺の背中に爪を突き立てて絶対に離さないと言わんばかりに抱き締めながら泣いている。これは、背中の爪痕が1日や2日じゃ治らない気がするな…

ゆつくりと頭を撫でながら落ち着くの待っていると、次第に鳴き声は収まっていき居心地が悪そうにモゾモゾと腕の中で動いている。

彼氏の腕の中でいるのに居心地が悪そうな理由を聞いてみると

「だっ、だっ… オマエの… その… えっ… お、おちんちんが… オレのお腹をぎゅーって、押ししてるん、だもん」

「それは仕方のないことだっって、可愛い彼女の安心した笑顔とか、縋ってくる姿を見て勃たない方がおかしいだろ？」

そう、可愛い彼女が離さないっって全力で表現されてるのを見てムラムラしない方がおかしいんだよ。

悪魔がまた出てきて押し倒しても仕方がないくらい魅力的なんだ。このままずっと抱き着いてると襲っちゃうぞぞ？

「えう、可愛いっって。へへっ、そうかな？… かわいい？」

「照れながら上目づかいとか反則だっって、超かわいい。永遠に独占したいくらいかわいいよ」

そういうと、むふふと満足げな息を吐いてもう一回強く抱きしめてきた。強くといっっても彼女の的には強く抱き着いてるっただけで苦しくも何ともない。むしろ、むき出しのおっぱいが押し付けられて気持ちいい。

上機嫌なままズリズリと体を下にずらして、チンコにほっぺたをぴちやりとくっつけた。

あっ、思ったよりも頬の温度が冷たい。

「あ、今、ピクツて動いたよね。ほっぺたくっつけただけなのに気持ちよかったの？」

勘違いしたままスンスンと匂いを嗅いだり、指先で弄っている。

じつとその様子を見てみると覚悟を決めた顔をして、口を広げた後、俺の顔を見たりチンコを見たり視線を彷徨わせている。

頭を優しく撫でてやるとちよつと悲しそうな顔をしてこちらを見上げてきた。

「……………ゴメンね……………まだ、フェエラは怖くってダメみたい。かわりに、んっ……………またこっちで、あつ、やる?」

そう言つて、クリをいじりながらM字開脚で誘惑してきた。

服は乳首が見えるように裂かれて、臍からは俺が出した白い液体がドロツと垂れてきている彼女を見て、また我を忘れて犯したくなつたが、俺の中にいる天使が最後の踏ん張りを見せているようだ。

怖がらせたお詫びにいつも以上にゆっくりしようとして心に決めて、優しく押し倒した。

「あつ、んっ……………ちゅ、はむ……………んっ……………はあ……………やっぱり、んっ……………ゆつつ、くり、はう……………してくれる……………んう……………キスが、好き……………ちゅ……………あむ……………しゃあわせえ……………」

目をとろんとして、幸せそうな雰囲気振りまいきながら俺の唇や舌にチューチュー吸い付いている。

さつき怖かったことを帳消しにしようといつも以上に甘えてきて本当にかわいい。

「はあ、ちゅ……………お前ホントにキス好きだよな」

「うんっ……………ずっつとしてほしい。エッチの時も、おはようの時も、おやすみの時も、いつてきますの時も全部してほしい……………他にもね、口だけじゃなくていろんな所にしてほしいの」

いじらしい。途中から恥ずかしくなつてきて視線を少し下げているところもかわいい。

もつと幸せにしてやりたいから頭を抱え込んで酸欠になりそうなほど深いキスをする。

「んんっ……………んっ……………ちゅっ、あむ、はあはんっ、ちゅ……………」

ふにやふにやに力が抜けて、爪を突き立てて強く抱き着いていた腕も今では添えられてるだけになり、力の抜けた笑みを浮かべている。

荒い息に、幸せそうな顔に似合わぬ涙の跡、知らぬうちに垂れた唾液、どれもが淫靡に見える。

ああ、もつと俺のモノにしたい。その欲望に少しだけ従って、舌を出してキスを待っているのを横目に首筋、鎖骨、谷間と痕が付くように強く、マークを付けていく。

「あつ、んっ、あはっ… いっっぱい俺のモノだぞって、ちゅっちゅって、印つけてえ… んっ… んっ、そんなところも印付けるの？」

最後に精液を吐き出し切って、透明な蜜があふれ続けている陰部や陰核に吸い付く。

「ああっ、しっ、げきが、つよいよお… もつと、やさしくっ、ぺろぺろってして？」

早く挿れてしまいたいけど、何度も無理をさせてしまったから最後くらいは優しくしてあげなきゃな。

コイツがさつきみたいに急な刺激に驚かないよう、ゆっくりとしたものに変えていく。

「あつ、うんっ、んう。それくらいが、いちばんっ… きもちいいよ。はふう… んっ… あっ、あっ…」

そのまましばらく、やわやわと弄りながら蜜をすすっていると軽く頭を抑えられた。

見上げると少し涙目で俺を見下ろしていた。

「はあ、はあ… ねえ、下にばっかり、キスしないで… う、上のっ、お口もかわいがってよお」

そんなかわいいことを言われれば言う通りにするしかない。

少し笑いながら体を起こして向かい合った

「全く、しょうがないな、いろんな所にキスしてって言うからしてあげたてたのに我儘なやつめ」

「うう… 一番、唇にしてくれるのが好きなんだもん。仕方ないじゃん」

立派なキス中毒だな。誰だよこんなのにしたのは…

あ、俺か。

「しっかり目をつぶれよ」

そういうと目をつぶって唇をちよつと突き出してきた。

最初みたいに触れるようなキスからゆつくりとしたデープキスに変えていく。片手で秘所をくちゆくちゆと弄りながら、もう片方の手で指同士を絡めてやる。

「ゆつくり、キてる…… あったかあい…… んっ、ちゆっ…… はあ、んんっ…… ちゆっ…… きもちいい…… あっ…… んんっ…… フーツ、もうっ…… ちよつとで、いくかも…… ちゆっ、あっんんっ…… んっ…… いくから…… いくからっ、てをはなして、ぎゅーってっ…… どこかに、イっちゃわわないようにっ…… ぎゅって…… ひんっ…… フーツ!…… はやくう」

軽く体が震え続けているから限界ギリギリなんだろう。手を離して逃げられないように痛いくらい強く抱き締める。

「あっ、んんんんんっう、イツ、くっ、はっ、あっあっあっあっイクイクツ、ぎゅーって、おねがあああっ、あっ、あっああああああああああああ、んいいいいいいっ……」

ビクツと強く震えてから、喉仏がくつきりと見えるくらい頭を反らして快楽を逃がそうとじたばたしている。

白い肌にさつき付けたキスマークが怪しく光っていて、少し落ち着いた彼女の首元にふらふらと引き寄せられてカプリと噛みついた。

「んんっ、ひうっ…… フーツ、フーツ、フーツ、あっ、んっ…… えっ？くび?…… なんでっ、かむのっ!…… ああっ、またイクツ、くるツツんんんんんんっっっっ!」

体を震わせてもう一度いった。

少しすれば感覚が戻ってきた様で、ぼんやりと期待に満ちた目で勃起した俺の相棒を擦っている。

コイツの方もコップをひっくり返したんじゃないかと思うくらい濡れている。

「それじゃあ、挿れるからな」

「うんっ、はやくう」

さつきと比べてすんなりと奥まで入ったのに、ナカはさつきと同じように精液を搾り取ろうと蠢いている。

「あああああ、はいったあ。今度こそ、んっ、ふたりで気持ちよくなるうね」

腕を俺の首に巻きつけて、幸せそうな笑顔をしている。

キスをして、それに合わせてゆっくり挿する。

「んっ……ちゅっ……あむっ、ろお？えっちながらのっ、キス……うまくっ、なつたでしょ」

自慢げに鼻を鳴らしている。

「そうっ……だな……初めてのキスと比べて、上手くなったよ」

「んふふ、いっぱい、きもちよくっ、してくれたもんね。がんばって、んっ、お返ししなきゃっもおもうよ」

そんな風にゆっくりしていると幸福感が押し寄せてきた。

幸福感を逃がさないようにしっかりと抱きしめ返して奥に届くよう挿を繰り返す。

「……あっ、やっ……おく、っ……きもちっ、いい……もっとおっ……とんっ、とんっ、たたいてえ。はうう……んっ、ちゅっ……」

コイツが嬌声を上げるたびにナカが小刻みに締め付けてくる。

一緒に気持ちよくなってほしいって全身でアピールして来るコイツは本当に男心を刺激するのが上手い。

「どお？んっ、きもちいい？わたしの、ナカあっ、あっ、んんっ、ちゅっ……きもちいいかな？……ひうっ、フーツ……フーツ……」

「ああ、すっげえ気持ちいいよ……もっど動いても、いいか？」

コイツは何も言わずに小さくうなずいた。

「んっ、んっ……はあっ、あっあっあっ……んいいい、いつっ、ひやあああ……んんうっっ」

首を横に振って必死に絶頂に耐えている。

限界が近そうだ。

「や、おく、もっ、ナカもっ、からだぜんぶっ、きもちいいよおお!!……あっやっ、イクね、わたしイッチャウからっ！はあっ、ああっっ！……いじらしいことを言うコイツに何度も何度も腰を打ち付けた。

こつちも限界が近い、強い刺激が来るだけでイってしまいそうだ。

親友くんとTS娘ちゃんのハジメテ

なんか、俺の親友が朝起きたら性転換していたらしい。

理由はよくわからないが人類の進化による作用がどうのこうのと難しい話らしい。有名な y o u t u b e r とか俳優も性転換したりして話題になってたしそういうものなんだろうな。

偶然にも親が旅行に行ってる夏休みに性転換して、どうしていいのかわからなくなり、混乱のまま息を切らせて俺の家に走ってきたアイツの話聞いてやったら、なんかやんやあつて恋人になった。

新しい関係に変わって1ヶ月。俺たちが新しい関わり方を知った。

これはそんな俺と性転換した元親友との日記の1ページ

アイツと付き合って1ヶ月、親友だったアイツがどんどん可愛く、女らしくなっていく。

彼女になったから鼻眉目で見えているのだろうか。

「かくれしくん！おはよう！今日も遊びに来たよ〜」

寒くなったからか、コイツは俺の家に来るときマフラーに厚手のコートを着て、短めのスカートと黒タイツをはいて来ることが多い。

「おう、おはよう。。。と言つてもな。もう3時過ぎてるぞ〜」

「にししくそんなアナタには3時のおやつをあげましょ〜」

そう言つてカバンからクッキーを取り出した。準備がいいじゃないか…。

受け取ったクッキーは見るからに手作り感満載の品物だった。

「お前、これ…。」

「ふっふ〜ん。彼女さんの手作りですよ〜食べてみなよ♥」

袋を開けると甘い香りが漂ってきた。これは期待できそうだな。

手に取つて口に入れると程よい甘さが広がった。

「うん、美味しい」

「そりやそうだろうさ！オ…ゲフン、ワタシが作ったんだからな！美味しいのは当たり前だ！」

コートを脱いでハンガーに掛けながら自慢げに言った。

よっぽど自信があつたんだろうな。鼻が10センチぐらい伸びるうな勢いだ。

子袋に入ったクッキーを監視されながら食べ切ったあと電話が鳴りだした。

「おっと、電話だ。静かに頼むぞ」

ニコニコしながら手でOKマークを作っている。

いざ着信を見るとコイツの母親からだった。なんで俺に電話をかけてきたんだ？普通なら俺じゃなくてコイツに電話すると思うんだが…

「もしもし、叔母さん？俺ですけど」

『ああ！すっかり繋がってるみたいだね。通話をスピーカーに変えな……………変えたかい？』

おとなしく通話設定をスピーカーに変える。

「はい、変えましたよ」

『よし、もうそのバカが持つて行ったクッキーは食べたかい？』

「ええ、美味しかったですよ。なにかマズイことでもありましたか？」
『いや、問題はないのさ。ただそのバカが作りすぎたクッキーを消費するのがアンタの義務だと思つてね。出来は良いが量が多すぎたね。明日の朝に取りに来な』

「は、はあ」

『アンタにあげる為とか言つてやり過ぎたのさ。一応、頑張つたみたいだから誉めてやりな！』

アイツをチラリと見ると顔を真っ赤にしてプルプルと震えながら俯いている。

『それと、そのバカは今日一日、帰宅禁止だよ!!私がこれ以上太つたらどうしてくれるんだい!どっかで野宿してから帰つてきな!!それか、その坊主の家に「かあさん!!もういいでしょ!切るよ!』」

俺の手から奪い取つた携帯を操作して通話を切つた後、すぐにクッションに向かって放り投げた。

「おいおい、俺の携帯が壊れたらどうすんだ」

「う、うるさい!!別にオマエのケータイなんかどうなつたつて知るも

んか！あああああ、あんな恥ずかしい話を聞かされるのならもっと早くに通話を切るべきだったあああ」

さつきからずつと顔を真っ赤にして震えてる。

「見るな！… 見ないでくれよ… かわ、まっかなんだ。みるなよお…」

顔を隠してしゃがみ込んでしまった。そんなに勢いよくしゃがんだらパンツ見えちゃうぞ。

ほっ、良かった…

「あー、なんだ。クッキーほんとに美味かったぞ。毎日食べたいくらいだ」

「う… うるさいなあ、こっち見るなっていつてんじゃん！… …… ふへへっ」

罵声にも喜色が混じっている。顔を隠すことを意識してるんじゃない、口元を隠そうと必死だ。露骨にニヤケ面を隠そうとしているのが分かったから、ちよつとだけ揶揄いたくなって頭を撫でてみた。「ななな、なにするんだっ！きゅ、急に頭を撫でるな！びっくりするだろうが」

これだけやっても怒ってるフリだ。なんだか楽しくなってきた笑いながら撫でまわした。

少しの間、続けていると俺の手が掴まれた。

「いい加減にしろよくワタシが怒らないから何してもいいと思ったか？」

おお、頑張つて凄んでいる。まつ毛長いな… こんな間近で見たのは一週間ぶりだぞ…

じーつと見つめていると顔を勢いよく背けてしまった。

「もー、今日のオマエは何か調子狂うぞ…」

女の子座りでぶんぶんしている。こういうところも何か、凄く… 女の子に変わっていつてしまっている気がする。前なら足を伸ばして足先をプラプラしていたのに…

疑問と思いつつも変に刺激してしまうよりいいかと思いい放置している。

「それで… 叔母さんの帰宅禁止令って本気か？」

さっきの電話で気になったことを聞く。

「あ、えと… うん。多分… あれは本気で言ってるよ。今から家に帰っても… クッキーだけ持たされて追い出されるに違いないよ」

「そうか… 本気かあ…」

気まずい空気が部屋を流れた。

耐えきれなくなった俺はもぞもぞと動き出して、冷蔵庫の中からジュースを取ろうとしたけれど、冷蔵庫の中は空っぽだった。賞味期限がヤバいからって昨日全力で消費したの忘れてた…

いそいそと同じ位置に帰って目線を彷徨わせていると時計が目に入った。時計の針は4時30分を指そうとしていた。そのまま、ボーっとしていると長針が7の位置まで動くのとほぼ同時にアイツが立ち上がった。

「帰る」

そう言って、カバンを肩にかけて帰ろうとするアイツを俺は咄嗟に呼び止めた。

「叔母さん… 本気なんだろう？その、晩飯ぐらい食べて行けよ」

廊下に行くドアの前で止まったアイツはこつちをちらりと見るとんつ、とだけ言ってコタツの近くに荷物を下ろした。

「待ってる。今からスーパー行って惣菜とか買ってくるわ」

三角座りで小さくうなずいたアイツを置いて家を出た。

スーパーで買い物済ませて、帰ると時計は6時を指そうとしている。アイツは出ていく時と同じ姿勢で顔を伏せていた。

体調でも悪くなったのだろうか、心配になった俺は軽く声をかけた。

「おい、大丈夫か？どこかしんどい所があったりするのか？」

アイツは俯いたまま、力なく首を横に振った。落ち込んでいる様子だから、荷物をコタツの上に置いて隣に座ってやる。

「お前は分かりやすいな。笑ったり、怒ったりの主張は激しいくせに落ち込んでいるときは殻に引きこもっちゃうんだから」

ポンポンと頭を撫でる。ギョツと膝を抱えた後、小さい嗚咽のよう

な音が聞こえた気もしたが、きつと気のせいだろう。

「それで、何をそんなに落ち込んでるんだ？」

「…うるさい… オツ、オマエはツ、関係ないツ…」

喉を鳴らして反論してくる。

「うそつけ、家に来たときはニコニコしてたのに、こんな風に落ち込まれたら誰でも俺のせいだなってわかるよ。理由は… 言いたくないか、そうだよな」

ずっと、首を振って俺に顔を見せてくれない。泣かせてしまった事は分かるのに、理由が分からないんじゃないや謝るのはコイツをイラつかせるだけだから、俺は大人しく隣に座り続けるしかなかった。

そのままどのくらい経っただろうか、日は完全に落ちて周りの家がシャッターを閉める音が聞こえるくらいになってこいつが口を開いてくれた。

「きょう… 泊まっても、いい？」

そんな、返事なんてわかり切っていることを聞いてきた。

「いいぞ… 寝間着とかは、俺の物になるけどいいか？」

「… うん」

ほつとしたような声の後、また、三角座りに帰ってしまった。俺はクツキーを食べたからまだ大丈夫だが、コイツは腹が減ってるだろうと思つて、買ってきた揚げたてだったコロツケとかを目の前においてた。

匂いにつられたのか、ゆっくり顔を上げたそいつの目元は真っ赤に腫れていて、何度も目を擦ったのが分かった。

「それじゃあ、食べようか」

「んっ」

二人でご飯を食べたけれど始終無言で重苦しい空気が場を支配していた。

アイツが完食して、ごちそうさまでしたを言い終わると、また、三角座りに帰ってしまった。

「片づけとくからお前は先に風呂入っつけ、俺はその後にも入るか」

そう言っても返事も無くじつとしてる。

サツと食器を洗って帰ってきてきてもずっと同じ姿勢で固まっている。相も変わらず顔は伏せてしまったままでだ。

ゆっくり肩を揺すって、一番風呂もらうちまうぞと言っても膝を抱え込んでだんまりだ。

しょうがないから先に風呂に入る。

「もしかなくても、そういうことだよな……」

風呂の中でつい、ため息が漏れてしまう。

親友から恋人に変わって早1ヶ月、恋人としてキスは何回かやったけどその先はまだやってない。アイツは……俺に迫られるなんて気持ち悪いだろう、そう考えてしまつて先に進めない。

各地で問題になっている他の性転換者の報道を思い出す。ある人は信頼した人に裏切られて精神錯乱の後に傷害罪で逮捕。ある人は周りの人間に言い寄られて気持ち悪くなって自殺。

俺は……アイツがそんな風になることに耐えきれないし、もしも、俺がそんな状態にしてしまったと考えるだけで吐いてしまいそうだ。大切な人だからこそ、アイツにはできるだけ男の時のように楽しく笑っていてほしいし、辛い思いをしてほしくない。

ぐるぐると答えの出ないことを考えているうちに長風呂しすぎたみたいだ。

風呂から出て体を軽く拭いた後、服を着て部屋に帰ると、アイツが座っていた位置にはカバンだけが置かれていて、ハンガーを見るとコートもかかっていた。

こんな寒空の元で上着も着ずに飛び出したのかと嫌な想像が頭をよぎった時、ひたひたと足音が聞こえて背中に強い衝撃が走って締め付けられた。柔らかい感触が背中にあたる。

「うっ……よかった、お前か……トイレにでも行つてたのか？部屋にいなかったから、こんな寒いのに外に出ていつちまったのかと思つたじゃねえか」

無言ですつと抱き着いてくるから、振り向こうとしたけど小さな声で振り向かないでと言われた。

そのまま固まっていると緊張したアイツの声が聞こえてきた。

「ねえ… オレとセックスしようよ」

唐突に投げられた話題に対応できない。

「電話の後からね、ずっとかかんがえてたんだ。オレは… オマエのことを親友じゃなくて、女の子として好きになっちゃったけど、オマエはどうかのかなって。本当にオレのことを… 好きでいてくれるの、かなって。そしたら、急に悲しくなってきた、何としても繋ぎ止めなきゃって。」

これまで頑張つて女の子らしくなろうって、いろいろやったけど、効果薄いし。でも、オレがオマエにあげられるのって体ぐらいなのに、元男なんかの体なんて気持ち悪いかなって。それに、オレが告白した時も好きって言ってくれたけど、ホントは気持ち悪かったのになって。お情けでここにいさせてくれてるだけなのかなって。

オマエに気持ち悪がられるぐらいなら、頑張つてこの気持ちも捨てるからさ… はつきりしてよ… こんなっ！こんなぬくもり知りたくなかった！つらい… つらいよお…」

回された腕に手を置いたら、ビクツと後ろのアイツが跳ねて強く抱きしめてきた。

「お前は… 本当にそれでいいのか？」

ここで俺が選択を誤ればコイツの人生が終わってしまう。慎重に、勘違いを起こさないようにはつきりと最後の確認をする。アイツは後ろで小さくうなずいた。

俺は、逃がさないように腕をつかんでゆっくり振り向いた。

そこには、俺が風呂に入るまで着ていた服は脱いで、ぶかぶかなシャツ一枚に着替えて素足を晒したアイツが立っていた。

思わず唾を飲み込んだ。

否が応でも興奮してしまった自分が嫌いだ。親友だった彼女を性欲のはけ口として見てしまったような気がして、どうしようもない嫌悪感が溢れてくる。

でも、今回はこれで良かったのだろう。彼女にとって今大事なのは俺が彼女を抱けるかどうかなんだ。

「分かった。やろうか」

ベットの方に誘導して押し倒した。目元が赤く腫れていて、泣かせてしまった事を強く自覚した。

「それじゃあ……触るからな。嫌なことがあったら言えよ」

俺の服を握って期待と不安が見えるコイツの胸を揉む。

ふわふわしていて気持ちいい。揉んでいると満足げな顔を浮かべている彼女と目が合った。

「オレの胸、気持ちいい?」

「ああ、気持ちいいよ。ふわふわしてて、マシユマロなんて目じやないくらい気持ちいい」

そう言うと、いつもみたいに楽しそうに笑っている。俺の心配は杞憂で、もっと早くコイツに迫るべきだったのかもしれない。

「……キス、してほしいな……前みたいに優しいのじゃなくて……えっちなやつ」

また、不安そうな顔になった彼女に返事をする事なく、口づけする。服を掴んでいた手が頭の後ろに回って俺の頭を抑え付けてきた。

口を開いてお互いに夢中で舌を絡ませ合う。ぎこちなくて触れ合わせているだけかもしれないのに気持ちよかった。

彼女の口は薄いコロツケの味がした。

苦しくなってきたからか、頭の拘束が緩くなってきて、ついには口も離れてしまった。

二人とも口から舌を出して息を荒くしている。その間には透明な橋が架かっていて、俺は、その橋を切らすまいと息が荒れていることも無視して彼女の頭を抱え込んでもう一度キスをした。

「んんっ!……ちゅっ……ああ、ちゅっ」

さつきと変わらずに受け入れてくれている。

同じように息が続かなくなるまでキスしたい。もっと、彼女を感じていたい。

俺の限界が来るよりも早く、吸い付いていた彼女が離れたがっているので名残惜しくなりながらも顔が見えるように離す。

その顔は、泣いて擦ったのが分からなくなるくらい赤く染まってい

て、荒い息をして幸せそうな顔をしている彼女は今まで見た中で一番きれいで・・・それを見た俺の中には達成感と幸福感、それと少しの罪悪感があった。

「ハア・・・ハアツ、ありがとう。キスしてくれてありがとう・・・抱きしめてくれてありがとう・・・もつと、オマエを・・・」

首を振ってから

「アナタを、教えてください」

そう言って、俺の首筋にキスしてきた。

「服、脱がせるからな」

うなずいた彼女の服を脱がせる。

下着はつけてなくて、一枚脱がせただけで裸になった彼女が座っていた。

全く隠さない彼女を魅力的に感じてしまい、今にも襲ってしまいうだから少し目をそらしてしまう。

「少し待ってろ、いつぞやの誕プレでもらったコンドーム取ってくるから」

「待って・・・はじめは、ゴムを付けずにおねがい・・・はじめだけで、いいからさ、アナタの温もりを感じさせて・・・ください・・・」

きつく腕をつかんで頼み込んでくる。

そんな無責任なことを俺はしたくない。コイツは自棄になっっているのかもしれない。それに、もしもがあったら俺だけがどうにかなら構わないけど、コイツまで一緒に不幸になるのはおかしな話だ。

「責任を感じたくないとかクズみたいな理由じゃないんだぞッ！俺みたいなガキがお前を孕ませたとき、お前や子供を不幸にすることは確かだ。そんな奴に大切なお前を預けないでくれッ!!」

ハツと気づいた時には熱くなって、怒鳴るように言い切ってしまった。

彼女を見ると驚いた様子で、すぐに幸せを噛みしめている様に泣き出した。怒鳴ってしまったのに嬉し泣きされてはなんて声をかければいいのか分からない。

けど、分からないなりに、自然と彼女を抱きしめることができた。

裸の彼女は想像していたよりもずっと細くて柔らかくて、本当に変わったんだと理解させられた。

抱きしめて泣き声が治まったところには抱きしめ返してきて、胸元に甘えてくる彼女がいた。

「突然、怒鳴ってごめん」

「うんっ…いいよ。許してあげる…わたしとエッチするの…わたしの間に子供ができるの…いい、嫌じゃないの?」

よく分からないことを聞いてくるコイツは本当にうれしそう

「お前以上の相手はこれからの人生で現れるわけないし、俺の人生で隣にお前がいらないなんて想像もできないんだよ…ずっと俺のそばで笑っていてほしい」

気持ち悪がられると思って言えなかったことをポロツと漏らしてしまった。

慌てて口を押えたが、出てしまったものは止められなかった。

「えへへっ…そっかあ…嫌じゃないんだあ」

顔を上げて楽しそうに俺の顔を見てくる。恥ずかしいやら、ばつが悪いやらで顔を反らしてその視線に耐えた。

「なら、このままでもいいよね?」

そんなことを言われたから驚いてしまう。

それではまるで

「わたしと、子どもをつくって欲しい。ずっと隣にいさせてほしい。今日は、大丈夫だから…不幸になんてならないから、わたしの幸せを願ってくれてるなら、しよ?」

そんな言い方、卑怯じゃないか。

無責任な男になってしまう。それが自分にとって一番の幸せって雰囲気を出さないでくれ、ダメだと分かっているのにフラフラと吸い寄せられてしまう。

「わたしのことを思ってエッチを我慢してくれてたんでしょ? なら、はじめての今日は特別だから…おねがい…」

もう抑えが利かない。きつと最後までしてしまおうだろう。

「…努力はするけど、お前を気持ちよくはできないだろうし、俺本位

のセックスになるからな…これまで待たせてゴメン…それと、ありがとう」

俺も服を脱いで仕切り直しのために、もう一回キスから始める。息を荒くして、さつきよりもずっと深くで繋がれるように彼女を貪る。

「んっ…ちゅっ…はむ…んっ、はう…ちゅ、んんっ！…はあ、はあ…」

「はあっ…ほかのところも…触るからな」

どちらの物かも分からなくなった唾液を飲み込んで、彼女の秘所のスジに沿ってゆっくりと撫でる。

どこを触っても柔らかくて気持ちいい。こんな、手で触るだけでも気持ちいいのに、限界まで張り詰めている愚息を挿れてしまったらどれだけ気持ちいいんだろうか。

「んっ…んふふ」

「何かおかしかったか？」

「んくん、なにもおかしくないよ。あなたが、わたしの大事なところを、一生懸命触ってくれてるなって思ったら、嬉しくなってきちちゃって…」

本当に幸せそうに笑うな…心の底から大切にしたいって思う。

クリトリスとか、敏感なところは急に触るとびっくりするとか聞くし、なるべく強く触らないよう丁寧に愛撫する。

愛撫しているうちに閉じていたところは薄っすらと開いて、俺にきれいなピンク色を見せていた。垂れてきた愛液が彼女の大切なところを濡らして、艶めかしく光を反射している。

彼女に傷をつけないように中指を挿れると、思ったよりもすんなりと第二関節まで入った。指を一本挿れただけなのに、きゆうきゆうと締め付けてきて、本当に…ここに全部入るのか不安になってくる。

「んっ…ふうう、あっ…入ってきてる…」

「痛くないか？」

「なんか、変な感じするだけで、むしろ…気持ちいいよ」

少し眉をひそめながらニヒヒと笑ってる。きつと、少しきついんだ

ろう。

俺のために頑張っているのを見ると愛おしくて仕方がない。

もっと気持ちよくなって欲しい。俺にいろんな表情を見せて欲しい。コイツを自分のモノにしたい、そんなことを考えてナカを擦る。

「ひんっ… なんか、いつもより… おく、きてる」

「いつも？」

「なっ、なんでもない…」

「そっか」

きつと、何度かオナニーしてたんだろうな… 赤くなつて可愛い。気持ちよさそうでほんとはよかった。

「もう一本挿れるからな」

「うん… あっ、ちよっときつい、かも… ふっ、んんっ… はあ… んっ」

ちゃんと人差し指も入ってくれた。指を一本でもあれだけキツかったから、無理なんじゃないかと心配したけど、大丈夫そうで安心した。

そのままくちゆくちゆと動かす。ナカは彼女の愛液で濡れていて、締め付けてくる以外はとも動かしやすい

「なんかき、んっ… ナカでいっぱい動かされてさ… しあわせっ、だよ」

嬉しいことを言ってくれる…

いじっていると、彼女の口から喘ぎ声が出てきて俺の耳を犯してくる。こんなにエロい声が出せるなんて知らなかった。目がトロロンとして、ふにやふにやに溶けている。

早く… 早く、はやく！今すぐに挿れてしまいたい。

もういいだろうか。十分にほぐしたよな。指二本で広げたら大した抵抗もなく広げれたし、きつと大丈夫だろう。

「それじゃ、ちんこを挿れるからな。痛かったり嫌だったらしつかり言うんだぞ」

「はあ、はあ… んっ、きて？… おつき… はあっ、フーッ… はあっ、はあッ… はいっ、くるのスゴ… ぜんぶはいるかな

?…ちゃんど…おんなのこ、してるかな?きもちいい?…
わたしのナカはっ、きもちいいかな?…おしえて、ほしいな…」
「きもちいいよ。お前みたいにかわいい子は他にいないからさ…安心しろよ」

時々、不安な顔を見せてくるからこれで良かったのかという考えが脳裏をよぎるがすぐに快楽に流されてしまう。

透明な汁を垂れ流す彼女の秘所が、俺の醜い欲望をしつかりと受け止めてくれている。奥に進める時、膣が精子を搾り取ろうとチンコ全体を締め付けて思わず射精してしまうんじゃないかってくらい気持ちいい。彼女のことを無視して、この穴を突きまくって射精したい。始める時にできるだけ優しくする、なんて決めていたのが嘘のように獣欲が溢れてくる。

グツグツと煮える獣欲が漏れかけた時、ナニカに引っかかった。きつと、これが処女膜ってやつなんだろうな…

「膜、破るぞ…初めては痛いって聞くし…何か気を紛らせそうなことあるか?俺にできる事ならなんだってするぞ」

「…き、キス…キス、して…ほしいな」

「っ…わかった」

あまりにも可愛い注文だった。こんなにキスを求めるなんて、キスが好きなんだろうか?

息ができなくなるような深いのじゃなくて、顔を見ながら唇や舌を触れ合わせるだけのやさしいのを何回も繰り返してやる。キスをするたびにナカを締め付けてくるから暴発してしまわないように必死だった。

「んんっ…んっ…ちゅっ…はあ、んっ、ちゅ…んう…ちゅっ…はあはあ、んっ、んいつ、そこ、膜があるの?ちゅっ、なんか、ちよつと、きもちいい…かも、んっ!んんんんっ!」

キスで彼女の全身の力が抜けたくらいに腰を動かして膜に先っぽを何度も当てる。荒れていた呼吸が落ち着いてきたら、痛みが起らないよう祈りながら破れそうな力で突いた。

プチッと膜が裂けるような感覚と同時に彼女が俺に強く抱き着い

てきた。目尻に涙が浮かべて、口を噛み締めてるから、きつと痛かったんだよな…。なんて陳腐なことを考えてしまった。

「ごめんな。痛かったよな…。」

「んっ…。ぜんぜん、痛くないよ。急に抱き着きたくなっただけ、だから」

そんな表情なのに痛くないって言われても、嘘だと誰だっかわかる。

それでも、気丈に振舞っているのは俺に罪悪感を感じさせないためなんだろうな…。このまま痛みが引いて慣れるまではじつとしていよう。

「痛くなくてよかった…。もうちょっとだけ、このままでもいいか?」

「うん…。すつ、好きな女の子の初めてを、奪った、余韻にでも浸りたいの?…えっち」

薄っすら顔を赤くして俺を煽ってくる。

きつと、痛いのがバレて気遣われているから気恥ずかしくなって、ついやってしまったんだろうな。ずいぶん可愛いことをするじゃないか…。こっちは我慢してるっていうのに誘惑するのはやめてくれ。本能で動いてしまっても知らないからな。

「エッチで悪かったな…。動いてもよくなったら言うんだぞ」

こくりと頷いてるのを見てから頭を撫でていると、少ししたら彼女が俺の首筋をペロペロと舐めてきた。これは…。動いてもいいという合図なんだろうか。

舐められるたびに自制心がゴリゴリと削られるんだが…。本当に動いてもいいってことでいいんだよな?」

「動くからな」

「…。うん…。わたしに、女をもっと教えて?」

甘えた声で囁かれた。脳が震えるような感覚と、これまで意識しないようにしていた結合部がキュツと締まって、理性を奪い去っていく。

できるだけゆっくりしようとは思っていたが、一突きごとにキスし

ていたせいで今まで見えなかった膨らんだ胸と淡いピンク色をした乳首が揺れて俺を誘惑してくる。

五感すべてから彼女を感じて、快樂に脳を支配しているような気さえる。

「んっ、あっあっ、ナカでっ動いてるよ。おっきい…けど…ちやん、とっ、ぜんぶ、はいったん、だよ。んっ、うれしいなあっ…あっ、んんっ！…きもちいい？わたし、しのおまんこ突いてっ、きもちいい？もっとしたい？…はうっ…あっ、ひう、ずーっど…えっちしてくれる？」

「きもちよくなかったら、こんなっ、必死に腰振るわけないだろ！いくらでも！えっちだろうが、なんだろうがするって!!」

「んんっ、ほんと？こんなっ…変な…オレでもついいの？」

「もちろん、だって、何回もっ言わせんなよっ！…すっげえツきもちいいし、ずっとしてたい。他のやつがっ、なんて言おうとも、お前が好きだからさ。完璧な女の子じゃなくてもいいんだよ！だから…お前を俺にくれっ！」

「えっ、へへへっ…あっ、んっ…もっとおっ…いっばいっ、奥まで突いてっ！もっともっど！わたしのナカをつ、オマエ専用にな、作り替えてっ！」

かなり乱暴にしてしまっているのは分かるが体が言うことを聞かない。どれだけ突いても、苦しそうな表情よりも幸せそうな表情が前面に出ていて歯止めが利かない。止めてくれっと思っ心と、このままナカに出して俺に縛り付けてしまえっ心がある。なんで、はじめがこんな乱暴な抽挿なのにそんなに幸せそうな表情をしてるんだよっ！もっど、苦しそうな顔を見せてくれたら、俺だっど止まれるのに…ああ、限界が近づいてきた。

「ああっ、んっナカで、膨らんできてるっ…」
「そろそろ出るっ！…はあっ！はあっ！ナカだしするわけにはっ！
いかなからっ！限界だからっ、抜くぞ！」

そう言っ、チンコを抜こうとしたら今まで大人しかかったコイツが俺を腰に足を使っ抱き着いてきた。限界だっただけにトドメの刺

激になつて、

「お前ッ!... 射精^でるっ」

「あつ、おちんちんビクツてしてる... 今、精子流し込まれてるんだ... 先っぽからいっぱい精子出てるのが分かるよお...」

限界まで我慢していたのもあるけど、それ以上にナカに出してしまつた興奮で余計に出た... すっごい気持ちよかつた...

折れるんじゃないかと心配なくらい勃起してたチンコも満足してある程度のサイズにおさまつたから彼女のナカから抜いた。

乱暴になつてしまつたから怖がつたり、嫌われてしまふんじゃないかって思ったけど、ボーつとしながらコイツも精子が出された辺りを優しくさすりながら嬉しそうにして、告白できた時くらい幸せな雰囲気を出してるから良かった。

..... ハッ!? そうじゃない! こいつが喜んでるのは良いんだが、ナカ出しはマズイって! もしもがあつたら一大事じゃねえか!!

あああああ! こういう時どうすればいいんだ! えつと?... ..

あつ!

「おい、風呂行くぞ」

「え?... うん」

ニコニコしながらお腹をさすっている彼女を無理やり連れて風呂場に入る。

風呂場は俺が入った時の暖気が残っているおかげで、ほんの少し暖かかった。さつき使ったバスタオルとタオルを数枚を重ねて床に敷いた。

その上にコイツを座らせて股を開かせる。

「今度はお風呂でするの? オレは嬉しいけど、あんないっぱい出たのに大丈夫?」

「... 夢見心地なのところ悪い、何年後かならいいけどさ。今、ナカに

出しちゃうのはヤバいからな... とりあえずかき出せるだけだそう
な」

「え？ナカ... だし...？」

ほかんとした表情でコイツは自分のお腹の方を見て、俺のチンコを
見て、もう一度お腹を見る。

次第に状況を理解して来たのか俯きながら口を開いた。

「あつ、あ、ああああああああああ!!!ごめんなさい。ごめ
んなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。約束守れ
なくてごめんなさい。ナカで出させてごめんなさい。もうしません
許してください。嫌わなくてください。離れていかないでください」お
い！馬鹿言うな！それくらいでお前のことを離すわけないだろうが
!!」

肩に手を置いて、目線の高さを合わせてできるだけ優しい口調を心
掛ける。

「いいか？ナカだしは俺のせいでお前のせいじゃない。あと、子供が
できたからってお前を離すつもりはないから安心してくれ。大丈
夫... 大丈夫だから、ほら、深呼吸して」

抱きしめながら背中を優しく撫でる。ガタガタ震えて過呼吸気味
な彼女が正気を取り戻すまでずっと、大丈夫... 大丈夫だからって撫
で続けた。

「落ち着いたか？」

「... 急に、取り乱してゴメン」

錯乱状態から無事に帰ってきてくれて良かった。

さっきまで抱きしめていたのに抱きしめていた部分以外は冷え
切っていて、どんな言葉よりも怖かったこと主張していた。

「許そう。ほら、体が冷え切ってるじゃないか、あったかいシャワーで
も浴びよう... よしよし、温度もいい感じだな。じゃあ、流すぞ〜」
「じ、じぶんでっ、それくらいできるっ」

涙声で言われても譲るつもりはない。シャワーに手を伸ばして奪
い取ろうとしているが手で制してなんとか守る。何度か取ろうと頑
張っていたが俺が渡さないと悟ると大人しくなった。

顔の方にはかけないように注意しながら、体の端から中心の方にゆつくりと当てていく。

全身に当てたら水の勢いと温度を弱めてコイツの秘所に当てる。

「お前との子供ができるのは嫌じゃない。でもな、俺らみたいなガキが子供を作ると大変なんだ。だから、ナカからかき出してもいいか？」

「…うん…いいよ…全部、かき出しちゃってよ」

ゆつくりとナカからかき出していく。シャワーの流れる音とコイツの控えめな喘ぎ声が浴室に響いていた。

粗方流し終えたくらいに、浴室にコイツがすすり泣く声も聞こえるようになった。

「ごめんな。俺がもつと金とか地位があればこんな事せずに済んだんだよ。責めるなら、俺を責めろ」

「ちがつ、わかんない…なんで…グスツ…悲しいのか、わかんない」

「そつか…このまま、風呂、入っちゃうか」

既に熱々だった風呂はぬるま湯になっていて二人でゆつくりするには十分な温度になっている。

ただ、二人で入るにはかなり狭いから膝の上のせて風呂に入ると、必然的に後ろから抱きしめるような体制になって、太ももにコイツの柔らかいお尻が当たる。

座り心地が悪いのかモゾモゾと動くから、そんな場合じゃないのに勃起してしまいそうだけど、何とかこらえてシャンプーしたり体を洗って風呂からでた。

コイツの髪を乾かして部屋に戻るとベッドの一部に真つ赤な血の跡がついていて、二人ともベッドで寝る気にはなれず、一枚しかない敷布団を床に敷いた。

「ほら、ちよつとばかり狭いけどギリギリ大丈夫だろ。ちよつとカビ臭いけど…まあ許せ」

「んっ」

部屋の電気を消して、もぞもぞと布団の中にはいつてきた。1人用

の布団だからお互い反対側を向いているけれど、ぴったりと体を触れ合わせている。

布団に入ってどれくらい経っただろうか。部屋が暗いから時計は見えないが、車の音とかが極端に少ないからきつと1時とか2時とかなんだろう。

「起きてるか？」

「…」

「まあ、起きてるわけないか。今日は、無理させちゃったもんな…俺はさ、多分…自分で想像しているよりもずっと、お前のことが大切なんだよ」

「……」

「だからさ、今日、お前が妊娠して、子供を産みたいって言ってくれたなら絶対、お前とその子が幸せになれるように努力すると思う」

「」

「本当に好きでさ、愛してるっていうのかな。ちよつと、恥ずかしくて面と向かっては言えないんだけど…そんな感じなんだよ」

彼女の方に顔を向けて、できるだけ耳元で囁く。

「愛してるよ。おやすみ」

ビクツとコイツの体が動いたが、耳に息がかかってくすぐったかったんだろうな。

俺は、ちよつと笑いながら目をつぶるとすぐに夢の世界に飛んでいってしまった。

「おやすみ」

最後にそう聞こえた気がした。